

拾遺抄の万葉歌

阪口和子

はじめに

平安時代の勅撰集で、作者を明記して万葉集の歌を採歌したのは、拾遺抄、拾遺集が最初である。古今集は「万葉集に入らぬふるきうた」を採り、万葉集は採歌の対象からはずしている。村上天皇の御代、梨壺の五人によって万葉集解読が行われ、同時に後撰集の撰集があつたが、万葉集に重出する歌はすべて「読人不知」となっている。⁽¹⁾一方、古今六帖には多数の万葉歌が収載され、古歌や万葉歌を集めた人麿集・赤人集・家持集が編まれている。また、順、能宣等後撰集撰者や好忠らの積極的な万葉語の摂取など、拾遺抄・拾遺集が撰集された頃には万葉集が身近な存在になつていようである。また、和泉式部集には、「人のもとより、万葉集しばしとあるを、なし、かきのもととめず

とて」⁽²⁾(続集四八三)の詞書がみえる。和泉式部が万葉集を所持していたことや、「梨(無)」の縁で「柿のもと」としやれているのであるが、万葉集を「柿本」と言っていることにも注目される。拾遺抄・拾遺集の万葉歌はこうした風潮を背景にしているのである。

ところで、定家以前は公任崇拜のもと拾遺抄が尊重され、定家以後拾遺集が拾遺抄にとつて代わつたことは周知のことである。拾遺集は拾遺抄を受け継ぎ、さらに歌を増補したのであるが、万葉集の享受ということについては、人麿歌の激増という点で、拾遺抄とかなり違いがみられる。こうした事実もふまえて、本稿では拾遺抄の万葉歌をとりあげて、撰者の公任が万葉集をどのように享受していたかについて考察したい。

拾遺抄(以下「抄」とする)には万葉集との重出歌が三十

四首ある。その内、作者名を記すのは二十六首あるが、人麿以外はほぼ万葉集に一致している。しかし人麿に関しては、全九首のうち万葉集との重出歌は七首あるが、すべて万葉集の作者不明歌である。また万葉集に無い歌が二首ある。⁽³⁾

次にこれらの万葉歌の収められた部立をみると、四季部八首、恋部二十首、雑部六首で、恋部が多いこと一目瞭然であるが、中でも人麿歌は恋部に七首と集中しており、この点でも人麿歌と他の万葉歌とに顕著な違いがみられる。このことから人麿歌については直接万葉集から採ったのではないことが明らかであり、おそらく人麿集等から採歌したものである⁽⁴⁾と推定される。このように万葉集享受といっても、人麿歌の場合は一律にいけないが、本稿ではひとまず万葉歌として同様に扱うことにしたい。

一 四季部の万葉歌

春部の万葉歌は次の二首である。

題不知

中納言安部広庭

八いにし年ねこじてうゑし我がやどのわかぎの梅はは
なさきにけり

(題不知)

大和守藤原長平朝臣

一七そでたれていざわがそのにうぐひすのこづたひちら
すむめの花見に

春部では、梅は八番から一八番まで十一首の歌群を構成している。その最初におかれた八番歌の「若木の梅」はまさにふさわしい語で、勅撰集初出の歌語である。一七番歌は鷹揚な宮廷人の梅花賛美を彷彿させる「袖たれて」の語がこれも勅撰集初出である。内容は古今調の典型である梅と鶯の組合せであるが、古今集には鶯が「木伝ひ散らす」花が詠まれている。また古今集は散る花で惜春の心を表現するのが常であるが、これは散る梅を楽しむという華やかな感じが新鮮である。⁽⁵⁾さらに、古今集では梅は香を詠むものが主であったが、『抄』では、花(八)、色(九)一、香(一二)一六、花(一七・一八)と、色香両方をバランスよくとりあげ、この「花」を詠む二首の万葉歌は最初と最後部にあつて、梅の歌群をまとめる役割を果たしている。

夏部は時鳥の二首であるが、この場合も時鳥歌群(六一)八〇)の最初部(二首目)と最後に置かれている。

なつ山をまかり侍るとて くめのひろつな

六二いへにきてなにをかたらむあしひきの山郭公ひと声
もがな

題不知

読人不知

八〇時鳥なくや五月のみじかよもひとりしぬればあかし
かねつも

時鳥の「一声」は、古今集に「夏の夜のふすかとすれば
郭公なくひとこゑにあくるしののめ」(一五六・貫之)があ
り、以後も「時鳥の一声」が歌語として定着するが、六二
番歌はその先蹤といえよう。⁽⁶⁾またその声を山路の土産にと
いう趣向は、これも古今集に「山のさくらを見てよめる
見てのみや人にかたらむさくら花てごとをりていへづと
にせむ」(五五・素性法師)がある。また八〇番歌は時鳥歌
群を締めくくり、かつ次の歌題「短夜」の歌になってい
る。夏の短夜を詠む歌は古今集にも「夏の夜はまだよひな
がらあけぬるを雲のいづこに月やどるらむ」(一六六・深養
父)が一首あるが、まだ歌題として確立するには至らず、
『抄』を俟って夏の歌題として確立し、以後の勅撰集に受
け継がれることになった。この二首の万葉歌は、時鳥の
「一声」、夏の「短夜」という平安時代の歌語が万葉集に発
していることを示す意味もあるのではないだろうか。

秋部は古今集の配列に倣い、「風」から始まり「七夕」
へと続くが、この部分に万葉歌が三首連続している。

題不知

安貴王

あきたちていくかもあらねどこのねぬるあさけのか
ぜはたもとさむしも

この歌は「風」の最後部(八九の次)にあり、勅撰集初
出の「朝けの風」が清新な印象を与える。例えば、枕草子
「風は 嵐」の段に「八九月ばかりに、……暁に、格子、
妻戸をおしあげたれば、嵐のさと顔にしみたるこそ、いみ
じくをかしけれ」とある、まさにそういう感触を実感させ
る歌語である。また「このねぬる」の語は恋歌的気分をも
つ「七夕」へ続くにもふさわしいといえる。これに続く
「七夕」歌群の二首は、

(題不知)

湯原おほきみ

九二ひこぼしのおもひよすらん事よりも見る我くるしよ
のふけゆけば

人丸

九三としに有りてひとよいもにあふひこぼしの我にまさ
りておもふらんやぞ

と、「ひこぼし」が詠み込まれている。古今集では「七夕」

の歌題では「ひこぼし」を詠むものは無く、また後撰集でも「ひこぼしのまれにあふよのとこ夏は打ちはらへどもつゆけかりけり」(二三〇・読人不知)一首である。⁽⁸⁾また『抄』の「七夕」の歌群は躬恒の「ひこぼしのつままつよひのあき風に我さへあやな人ぞこひしき」(九〇)から始まるが、この歌にも「ひこぼし」が詠み込まれている。「ひこぼし」も「あさけの風」同様、万葉語を意識したものである。古今集以後は「たなばた」に偏るが、『抄』では「ひこぼし」を復活させ平安時代の歌語と万葉語との連続性を示しているように思われる。

冬部は次の一首である。

一五〇あしひきの山ぢもしらずしらがしの枝にもはにも雪のふれれば⁽⁹⁾

「しら」の繰り返しによる調べのよさ、白樫に降る雪の清楚な美しさを、冬にふさわしい景物として採歌したのである。『しらがし』は後撰集に初出するが、『葦引の山におひたるしらがしのしらじな人をくち木なりとも』(二〇八四・躬恒)「しらがしの雪もきえにし葦引の山ぢを誰かふみ迷ふべき」(二二〇六・敦忠)などのように人事詠に詠み込まれている。このように実体をなくして修辭的に用いられ

るようになって「白樫」の元歌を提示しているともいえる。

以上の四季部に採歌された万葉歌は、「梅」「時鳥」「秋風」「七夕」「白雪」と、すべて古今以来の代表的景物を詠んだもので決して新奇なものではない。その中であつて「若木の梅」「あさけの風」など新鮮な印象の歌語の発見、「一声」「短夜」「彦星」「白樫」などが万葉語であり、かつ古今調へ連続していることを再認識させるような採歌がなされている。

二 恋部の万葉歌

四季部の場合ほとんど人麿集、赤人集、家持集と重ならず、万葉集との何らかの直接関係が窺えるのに対して、恋部は前述したように人麿集と関係の強いことが特徴である。また、恋部に採歌された万葉歌二十一首(非万葉歌一首含む)中、十七首(非万葉歌一首含む)が恋上にある。

まず、恋上について検討したい。『抄』の恋上は或るテーマのもとに数首を歌群にまとめるという構成がみられる⁽¹⁰⁾のであるが、次に掲げるのは「恋死」をテーマとする歌群である。

題不知

源経基

二四四あはれとし君だにいはばこひわびてしなんいのちの
をしからなくに

読人不知

二四五あひみてはしにせぬみとぞなりぬべきたのむるにだ
にのぶるいのちを

人丸

二四六ちはやぶる神のやしろもこえぬべしいまは我がみの
をしげなければ

太宰監大伴百世

二四七恋ひしなんのちはなにせんいけるひのためこそ人を
見まくほしけれ

人丸

二四八こひつつもけふはくらしつ霞立つあすのはるひをい
かでくらすむ

読人不知

二四九わびつつも昨日ばかりはくらししてきけふや我がみの
かぎりなるらん

中央に万葉歌を三首並べている。この歌群は最初に当代
歌人を置くが、後は読人不知と万葉歌人である。まず「死

なむ命の惜しからなくに」(二四四)・「死にせぬみとぞなり
ぬべき」(二四五)にこめられた逢いたいという切ない希求
から、「神のやしろもこえぬべし」(二四六)・「恋ひしなん
のちはなにせん」(二四七)と、いよいよつのる激情を率直
に表現し、やがて「こひつつもけふはくらしつ」(二四八)
・「けふや我がみのかぎりなるらん」(二四九)で諦観に至
るといふ構成になっている。「恋死」は万葉集の相聞に多
く詠まれており、古今集にも主に読人不知歌を通して入っ
ているが、慣用句的になっている。そうした「恋死」を
『抄』はあらためて「恋」の主要なテーマの一つとして取
り上げているのである。身近でかつ普遍的な課題であるこ
とを、当代歌人を一首目におき、その後は読人不知と万葉
歌人の歌を用いて示し、また古歌であるということから、
テーマの生々しさを和歌的世界にふさわしく緩和している
といえるだろう。

次は「初逢恋」の後朝であるが、これも恋歌の主要なテ
ーマである。

はじめてをんなのもとにまかりて又の朝につか
はしける

能宣

二五六あふことをまちしつきひのほどよりもけふのくれこ

そひさしかりけれ

権中納言藤原敦忠

二五七あひみてののちの心にくらぶればむかしはものもおもはざりけり

題不知

読人も

二五八あひ見てもなほなぐさまぬ心かないくちよねてか恋のさむべき

二五九我がこひはなほあひみてもなぐさまずいやまさり成るここのみして

人丸

二六〇あさねがみ我はけづらじうつくしき人のたまくらふれてしものを

二六一かくばかりこひしき物としらませばよそにぞ人をみるべかりける

この歌群の万葉歌は人麿の二首のみであるが、二五六番から二五九番まで男の歌が続くのを受けて、二六〇番は女の側から詠われていると解される。後朝の歌はその性格上同趣向の表現が多く、歌群として連続すると単調になりがちであるが、女の歌を入れることで変化をつけ、しかも「朝寝髪」「手枕」という古今調には希薄な官能的表現によ

つていつそう印象的になっている。しかしこの場合も言葉自体は美しく、また万葉歌ということでは生な感じがやわらげられている。最後に二六一番歌が「かくばかり」とこの歌群全体を受けてまとめられており、新旧の歌が効果的に後朝を表現して物語的要素も感じられる。

もう一例「待つ恋」(二八一〜二八七)の歌群をみたい。「待つ恋」は女の側から詠まれる。

(題不知)

人丸

二八二あしひきの山より出づるつきまつと人にはいひて君をこそまで

三百六十首なかに

曾禰善忠

二八二我がせこがきまさぬよひのあき風はこぬ人よりもうらめしきかな

題不知

読人不知

二八三あひ見てはいくひささにもあらねどもとしつきのごとおもほゆるかな

人丸

二八四たのめつつこぬよあまたに成りぬればまたじとおもふぞまつにまされる

つらゆき

二八五もはがきはねかくしぎも我がごとくあしたわびし

きかずはまさらじ

をとこのとひ侍らざりければつかはしける

読人不知

二八六ありへんとおもひもかけぬよの中はなかなか身をぞ

うらみざりける

題不知

二八七ゆふけとふうらにもよく有りこよひだにこざらん人

をいつかたのまむ

この歌群も人麿歌と万葉歌（二八三・二八七）を中心にとめられている。七首中四首が万葉歌であるが、さらに好

忠歌（二八二）も万葉語「わが背子」の使用や「君待つと

吾が恋ひ居れば我屋戸の簾動かし秋の風吹く」（巻四・四八

八・額田王）に拠った万葉調である。

次は万葉歌（二九六・二九七・三〇〇・三〇一）を軸に構

成された「旅恋」⁽¹⁾の歌群である。これは万葉集卷十二の

「羈旅発思歌」からヒントを得たのではないだろうか。

たびにおもひをのぶといふ心をよみ侍りける

石上おとまる

二九六あしひきの山こえくれてやどからばいもたちまちて

いねざらんかも

題不知

赤人

二九七わがせこをならしの山のよぶこどりきみよびかへせ

よのふけぬまに

読人不知

二九八はるかなるほどにもかよふこころかなさりとて人の

しらじものゆゑ

とほき所におもひ侍りける人をおきて

経基

二九九雲井なる人をはるかにこふる身は我がこころさへそ

らにこそなれ

題不知

読人不知

三〇〇やほか行くはまのまさごと我がこひといづれまされ

りおきつしまもり

みちをまかり侍りてよみはべりける

おとまる

三〇一よそにありて雲井に見ゆるいもが家にはやくいたら

むあゆめくる駒

「いもたちまちていねざらんかも」「いもが家にはやくい

たらむあゆめくる駒」などいかにも万葉風の歌がまとめら

れて物語的な構成になっている。

以上みてきたように、恋上ではテーマに沿って効果的に万葉歌が配されており、また古今調と融合する表現や言葉の補充、元歌としての万葉歌の提示など、明確な意図をもって採歌されていることが確かめられる。

恋下の万葉歌は四首と少なく、人麿歌は採られていない。

(題不知)

大伴かたみ

三六いそのかみふるともあめにさはらめやはんといも
にいひてしものを

坂上郎女

三八しほみてばいりぬるいその草なれやみらくすくなく
こふらくのおほき

読人不知

三九しかのあまのつりにともせるいさりびのほのかにい
もをみるよしもがな

この三首は連続しているが、いずれも「いも」「みらく」「こふらく」「いさりび」などの万葉語が目立つ。三一六番歌は、古今集の「かずかずにおもひおもはずとひがたみ身をしる雨はふりぞまされる」(雑・七〇五・業平)(伊勢物語

一〇七段)を始めとしてよく詠まれた「身を知る雨」の元歌ともいえるものである。三一九番歌の「しかのあま」は万葉集に多いが、古今集・後撰集ではみられず、「須磨の海土」「伊勢の海土」にとつてかわられる。一方『抄』では「須磨の海土」「伊勢の海土」はなく、この「しかのあま」を採って、文字通り「拾遺」である。「ほのかに見る」も、恋の常套表現であるが、その例にもなっている。三一六・三一八番歌は古今六帖にもあり、人口に膾炙していたものと思われる。この二首は新撰和歌に採歌されていることも注意される。

(題不知)

読人不知

三〇むば玉のいもがくろかみこよひもか我がなきゆかに
なびきいでぬらん

「黒髪」はこの他にも恋上に坂上郎女の歌(二七二)があるが、特に当該歌は前述の「朝寝髪」と同様、古今調には見られない官能的な表現で、後の和泉式部や待賢門院堀川に継承される新しい歌語の発掘といえる。⁽¹²⁾総じて『抄』の恋下は言葉に重点をおいた構成になっているが、これら四首もその方針に沿って採歌されている。

三 雑部の万葉歌

雑部は雑上に四首、雑下に三首である。

郭公をききてよみ侍りける

大伴坂上郎女

四〇三郭公いたくななきそひとりゐていのねられぬにきけ

ばくるしも

坂上郎女につかはしける

大伴のたむらの御女

四〇四ふるさとのならしのをかの郭公ことづてやりきいか

につげきや

二首の時鳥詠を坂上郎女に関連させて並べ、贈答歌のよ
うに仕立てている。時鳥の声が、物思いで眠れないことに
結びつくのは、古今集以来平安和歌の常套表現であるが、
四〇三番歌はその先蹤である。また「ならしの丘」(四〇
四)は、前述の「しかのあま」などと同じく、歌枕への関
心もあるのではないだろうか。

ものへまかりけるに、はまづらにかひの侍りけ
るをみ侍りて

坂上郎女

四六六わがせこをこふるもくるしいとま有らばひろひてゆ

かむこひわすれがひ

これも坂上郎女の歌で、貫之の「みちしらばつみにもゆか
むすみのえの岸におふてふこひわすれぐさ」(古今・一一一
一)の元歌といえる。もう一首は家持歌であるが、

紀郎女におくり侍りける

家持

四七〇ひさかたのあめのふるひをただひとり山辺にをれば

むもれたりけり

のように、家持の個性がみられる歌が採られていることに
注目される。

雑下は哀傷歌二首と、世の無常を詠じた沙弥満誓の歌で
ある。

さるさはいけにうねべのみなげてはべりける
を見はべりて

柿本人丸

五五わざもこがねくたれがみをさるさはいけのたまも
とみるぞかなしき

これは『大和物語』にも見え、物語的な背景をもつ歌であ
る。また五六二番歌は万葉集では恋歌⁽¹³⁾であるが、『抄』で
は哀傷歌として次のような配列のもと、為基歌と共鳴して
物語的な要素が引き出されている。

(大江為基)

五六一としふれどいかなる人かとこふりてあひおもふいも
にわかれざるらん

だいしらず

よみ人しらず

五六二うつくしとおもひしいもをゆめにみておきてさぐる
になきがかなしさ

以上、『抄』の万葉歌を検討したが、古歌ということ

直接的な表現を和歌的世界にふさわしく緩和させる、あるいは新しい歌語の発掘、平安和歌の元歌となった万葉歌の提示というように、万葉歌の特性を十分に認識し活用している。また「正述心緒」歌に注目していることも『抄』の歌風と関連して注目されることである。万葉歌を採歌するにあたって新奇さを求めるのではなく、万葉調と古今調の連続、融合が意図されていることが確認できると思う。

『抄』に初出の万葉歌が後代に影響している例も多いが、時代を越えて受け入れられやすいもの、真実をついたものを選んでいうことであろう。また、人麿歌については、九首中七首が恋歌であるが、その他の二首も秋部の七夕歌(九五)、雑部の采女の死を悼む歌(五五五)といずれ

も恋歌的なもので、『抄』の人麿は恋歌歌人といつてもよいであろう。拾遺集の万葉歌の採歌は人麿以外の歌人では『抄』に準じている。増補歌が人麿歌に集中していること、その大半が恋歌であることも『抄』によって方向付けられていたといえよう。

四 順の恋歌

万葉集に關してもう一点注目されるのは、次にあげる順の三首の詞書である。

万葉集和し侍りける

順

二八八おもふともころのうちをしらぬ身はしぬばかりに
もあらじとぞおもふ

万葉集の和せる歌の中

したがふ

三三三なみだがはそでのみくづとなりはてて恋しきせせに
流れこそすれ

万葉集和歌

順

三六一ひとりぬるやどには月の見えざらば恋しきときのか
げはまさらじ

清輔はこれに注目して『袋草紙』上巻に「拾遺集 同抄 ……花山院勅撰云々。此集中源順和万葉集歌云物有。或万

葉古語ヲ翻和になせる也云々。或万葉歌ヲ為本歌詠反歌、云々。予案之返歌之儀歟。一者、藤経衡和後撰歌ト云物有。後撰中優多ヲ百首許書出、其返歌ヲ詠ズル也。以之思之、彼順ガ所為ヲ模歟。一、万葉集ニ是ヲ和したとみゆる歌なし。是を返したるとみる歌は有間々。所謂、順和万葉集云：」とし、この三首の順歌を万葉集にある歌の返歌とみて、該当する万葉歌をそれぞれ二首ずつ挙げて¹⁴いる。

ところで、「万葉集和し侍りける」歌は『抄』以外にみえず、¹⁵『抄』が何を資料としたか不明である。しかし三首も採っている事は関心の高さを物語っている。『袋草紙』にいうところの、経衡の「和後撰歌」が順の「和万葉集」を摸したかとする説は示唆的である。事実順はさまざまな形式を試みている。例えば順集に「古万葉集の中に沙弥満誓がよめる歌の中に、世の中をなににたとへんといへることをとりにて、かしらにおきてよめる歌十首」(二一九)などとみえる。万葉集の訓点の産物として「万葉集に和する歌」といった定数歌を作る可能性は十分考えられるだろう。これら三首はそれぞれ、「おもふとも」(二八八)は「ゆふけとふうらにもよく有りこよひだにござらん人をいつかたのまむ」(万葉・卷十一・二六一三)の次に置く。「な

みだがは」(三二三)は「たまくらのすきまのかぜもさむかりき身はならはしのものにざりける」(読人不知)の前にある。この歌は万葉歌ではないが、万葉語「たまくら」が詠み込まれている。「ひとりぬる」(三六一)は「むば玉のいもがくろかみこよひもか我がなきゆかになびきいでぬらん」(万葉・卷十一・二五六四)の次に入る、という具合に、この「万葉集和し侍りける」という詞書と『抄』の万葉歌には深いかわりがある。つまりこの三首は平安歌へ万葉歌、万葉語をスムーズに結びつける意図のもとに採歌され配置されていることがわかれる。ちなみに順は『抄』に八首採歌されているが、恋部はこの三首のみである。順歌に付された詞書から、万葉集と平安歌の調和と連続性をもとめる公任の万葉歌観、万葉歌撰取の方法の一端がよみとれるように思われる。

注

『拾遺抄』の本文は『新編国歌大観』所収の宮内庁書陵部本に依り、片桐洋一編『拾遺抄―校本と研究―』(大学堂書店・昭和五十二年)を参照した。

『万葉集』『古今集』『後撰集』『拾遺集』の本文引用は『新編国歌大観』を用いた。『万葉集』の歌番号は旧番号による。

(1) 異伝も含めて万葉集に重出する歌の数は次のようになる
(数字は歌数)。

古今集 秋2・恋5・大歌所御歌1・神遊び歌1・墨滅

歌(恋2)。

後撰集 春5・夏3・秋10・恋3・雑1。

(2) 歌は「うきながらながらふるだにあるものをなにかこのよにしふもとどめむ」。

(3) 「たのめつつこぬよあまたに」(二八四)・「わぎもこがねくたれがみを」(五五五)

(4) 現存する『人麿集』の性格については、片桐洋一氏の『柿本人麿異聞』第四章『人麿集』の生成(和泉書院・二〇〇三年一〇月)に詳しい。その中で、平安時代の『人麿集(柿本集)』は、『万葉集』から柿本人麿呂作とされる短歌を抜粋した部分、『万葉集』には採られているが、柿本人麿呂作ではない別人の歌を補充採録した部分、さらに『万葉集』の作者不明歌を採択採歌した部分から成り立っているといわれている。拾遺抄や拾遺集が人麿歌を採歌した資料として、「原人麿集」ともいうべきものの存在が想定される。

(5) 「こづたへばおのがはかせにちる花をたれにおほせてこころなくらむ」(古今・一〇九・素性)。また古今集春下に「こまなめていざ見にゆかむふるさとと雪とのみこそ花はちるらめ」(一一一・読人不知)があることも思い浮かぶ。桜に対して梅で同趣向を意識したもののか。

(6) 時鳥歌群の最初(六一)は「はつ声のきかまほしさに郭公よぶかくめをもさましつるかな」(読人不知、重之集二四六に重出)である。初声を人より先に聞くという風流が流行するが、万葉歌にもすでに「常人もおきつつ聞くぞ霍公鳥此の暁に来喧くはつこゑ」(卷十九・四一七)などがある。

(7) この歌は底本には無いが、八九の次に流布本の島根大学本で補った(国歌大観番号は五八二)。島根大学本は第五句「さむしも」とあり、万葉集「手本寒母」(卷八・一五五五)に一致する。公任撰の深窓秘抄、和漢朗詠集も「さむしも」である。『抄』の異本である貞和本は「さむしも」とあり、拾遺集も「さむしも」とする。「あきたちて」に対して「さむしも」の方が適切ではあるが、平凡になる。

(8) 万葉集には「たなばた」(6首)「たなばたつめ」(5首)よりも「彦星」(16首)の方が多し。古今集は「たなばた」(4首)「たなばたつめ」(2首)である。「ひこぼし」が一首あるが、「我のみぞかなしかりけるひこぼしもあはですぐせる年しなれば」(恋二・六一二・躬恒)と恋歌に詠み込んだもので、作者は躬恒である。後撰集は秋部であるが、詞書に「かれにけるをとこの、七日のよまできたりければ、女のみみて侍りける」とあり、相手が男性であるから「ひこぼし」を用いている。これも実際は恋歌である。

(9) 底本は作者名がなく、「此歌柿下人丸集に有り 或本には三方沙弥がともはべり」とある。拾遺集は人麿とする。万葉集(卷十・三三二五)は左注に「右柿本朝臣人麿之歌集

出也、但件一首或本云、三方沙弥作」とある。

- (10) 『貫之から公任へ 三代集の表現』第二章 II (阪口和子 和泉書院・二〇〇二) 参照。

- (11) 勅撰集に歌題として「旅恋」がみえるのは、金葉集二度本に「旅宿恋の心をよめる 見せばやなきみしのびねの草まくらたまぬきかくるたびの気色を」(恋上・四〇五・撰政左大臣) や千載集に「旅恋の心をよめる 旅衣涙のいろのしるければ露にもえこそかこたざりけり」(恋三・七九一・僧都 覚雅) である。

- (12) 古今集・後撰集ではもつばら白髪と対照させて、歎老の心が詠まれる。『抄』でも「しはすのつごもりがたに年のおいぬることをなげき侍りてよみ侍りける むば玉のわがくろかみに年くれてかがみのかげにふれるしらゆき」(四三〇・貫之) が採歌されている。一方、恋歌の「黒髪」は、和泉式部の「くろかみのみだれもしらずうちふせばまづかきやりし人ぞこひしき」(後拾遺・七五五) や待賢門院堀川の「ながからむ心もしらずくろかみの乱れてけさは物をこそ思へ」(千載・八〇二) などの官能的な表現へ展開する。

- (13) 万葉集「愛しと念ふ吾妹を夢に見て起きて探るに無きが 怜しさ」(卷十二・二九一四「正述心緒」)、『遊仙窟』を踏まえた表現とされる。

- (14) 袋草紙は『日本歌学大系 第二卷』(久曾神昇編 風間書房) 所収本による。顕昭も拾遺抄註(『日本歌学大系 別巻四』) において、この清輔説に言及している。

- (15) 続古今集に「万葉集の歌和し侍りけるついでによみ侍りける」の詞書で順の歌(一三八九)があるが、これは沙弥満誓歌の「世の中を何にたとへむ」を上句において詠んだ十首歌(順集・一二三) 中の一首である。

- (16) この歌は底本には無いが、三一三の次に流布本の島根大 学本で補った(国歌大観番号は五八六)。

参考までに拾遺抄の万葉歌に該当する万葉集歌の番号を() に示した。

- 八(一四二三)・一七(四二七七)・六一(四二〇三)・八〇(二九八一)・九二(二五四四)・九三(三六五七)・一五〇(三三二五)・二四六(二六六三)・二四七(五六〇)・二四八(二九一四)・二六〇(二五七八)・二六一(二三七二)・二七一(五六三)・二七二(二七四五)・二七七(一九九五)・二八一(三〇〇二)・二八三(二五八三)・二八七(二六一三)・二九五(二七〇四)・二九六(二二四二)・二九七(二八二二)・三〇〇(五九六)・三〇一(二二七二)・三一六(六六四)・三一八(一三九四)・三一九(三二七〇)・三六〇(二五六四)・四〇三(一四八四)・四〇四(一五〇六)・四六六(九六四)・四七〇(七六九)・五六二(二九一四)・五七六(三五二)・五八一(二五五五)

(本学日本語日本文学教授)